

志摩の小庭 いかだ丸太の家

平成 30 年度第 2 回採択

建設地	: 三重県志摩市	竣工	: 令和 2 年 3 月	敷地面積	: 498.26 m ²
地域区分	: 6 地域	用途	: 専用住宅	延床面積	: 59.62 m ²
設計者	: m5_architecte 一級建築士事務所	構造・階数	: 木造軸組・地上 1 階	建築面積	: 67.59 m ²
施工者	: 東原建築工房				

■提案の概要

○地域の特色である「真珠や牡蠣の養殖」のいかだの材料である県産の“いかだ丸太”を使用する計画とした。いかだ丸太は若年木の間伐材である。

外周部は土壁を採用し、竹割り、竹小舞、荒壁塗り作業は、施主や知人の方々など、地域コミュニティと協力して作業した。

○建物の仕様は、夏の時期を考慮し、軒を深くし、日射しや雨天時の生活環境に配慮している。一日のうちに海風、凧、陸風という風の変化があり、その時間帯に応じた風が通り抜ける。その風を建物に取り込み、室内空間を自然に近い状態となるよう配慮した。また伊勢志摩国立公園という敷地に生息している自然樹木を考慮する計画とした。

○県産産を中心に、できるだけ近い産地の材を選定し、この地域に合った材を使用することで、環境負荷の低減に寄与する計画とするとともに、熟練の職人に加え地域で活躍する若い職人を積極的に起用することで、技術と縁を受け継ぐ機会を創出した。そして、土壁やもみ殻など自然素材の積極的な活用、古建具の再利用などにより、現存する文化やデザインも次世代に繋ぐ計画とした。



屋敷林の中に佇むシンプルな外観





“いかだ丸太”を現しにした開放的な土間空間



周囲の緑に溶け込む落ち着いた木質デザイン

■地域の気候風土への適応・環境負荷低減対策

凡例：気候風土への適応 



環境負荷低減対策 

□高天井 

最高高さ 3,239mm



高天井



□深い軒・庇  

○軒の出：南北 1,365 mm

○東西に小庇



深い軒・庇

□雨戸や障子と組合せた大開口  

海側と山側に大開口を設け、一日の風の編かに対応。



外部には木製の雨戸を設置し、台風に伴う強い風雨をしのぐ。



雨戸や障子と組合せた大開口



土塗壁

□土塗壁  

厚さ 70mm 以上



地元産の土、敷地内の竹の再利用、地元農家から入手した藁を用いた。



土間空間



開放的な床下（石場建て）

□土間空間  

冬季の日射しや薪ストーブの輻射熱を、土間に蓄熱させ、暖房器具の補助的な役割を図るとともに、このスペースを活かし、地域の多様なコミュニティ形成を図る。

□開放的な床下（石場建て）  

通気・乾燥、及びメンテナンスのしやすさが見込める開放的な床下工法としている。

□障子  



内障子を設置し、外部の庇とともに西からの日射しを調整し、また外部からの視線を遮る役割を持つ。



障子



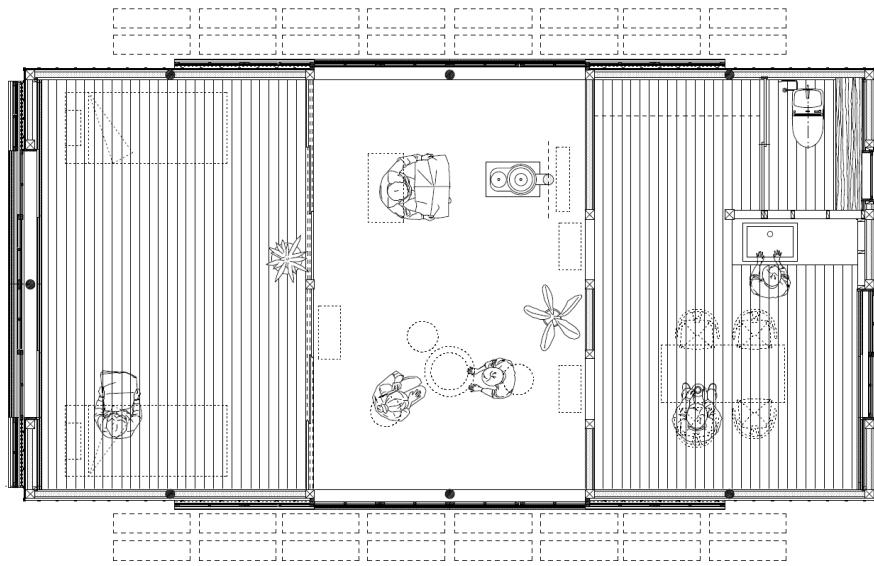
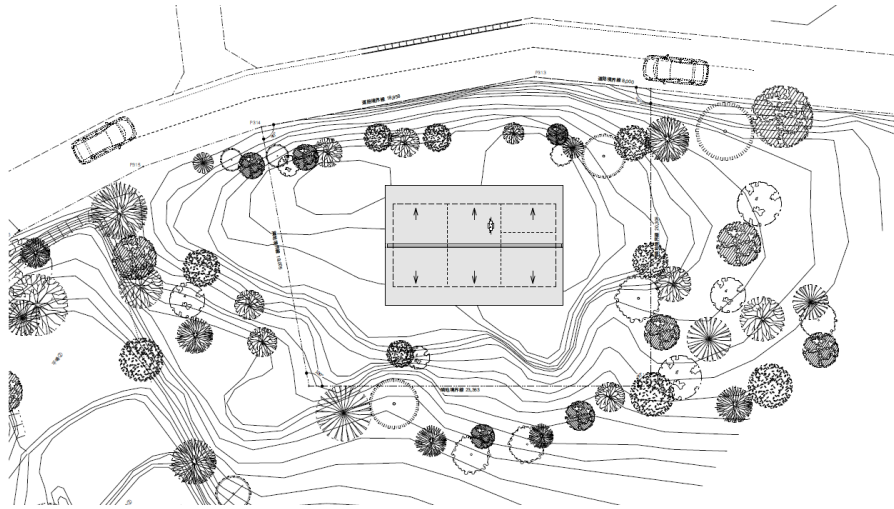
屋敷林

□屋敷林  

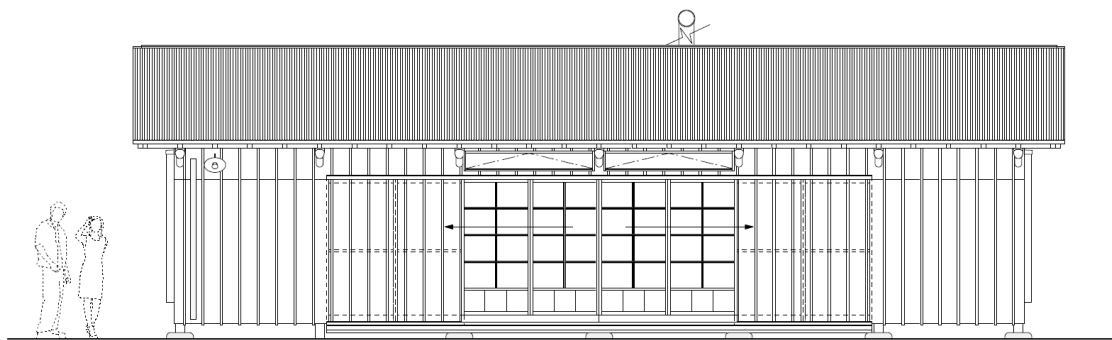
敷地内の自然木は極力伐採せずに建物配置を考慮。海や山からの強い風を遮る役割を果たす。

■エネルギー性能（採択時）

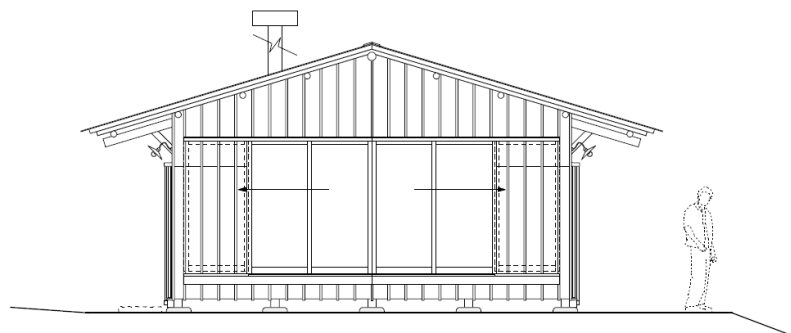
項目	基準値	設計値
評価方法	Web プログラム 気候風土適応住宅版による評価	
地域区分	6 地域（三重県志摩市）	
外皮平均熱貫流率（ U_A 値）	0.87 以下	1.87 W/ ($m^2 \cdot K$)
一次エネルギー消費量	87.1 以下	88.7 GJ/ (戸・年)
一次エネルギー消費性能（BEI）	1.0 以下	0.90



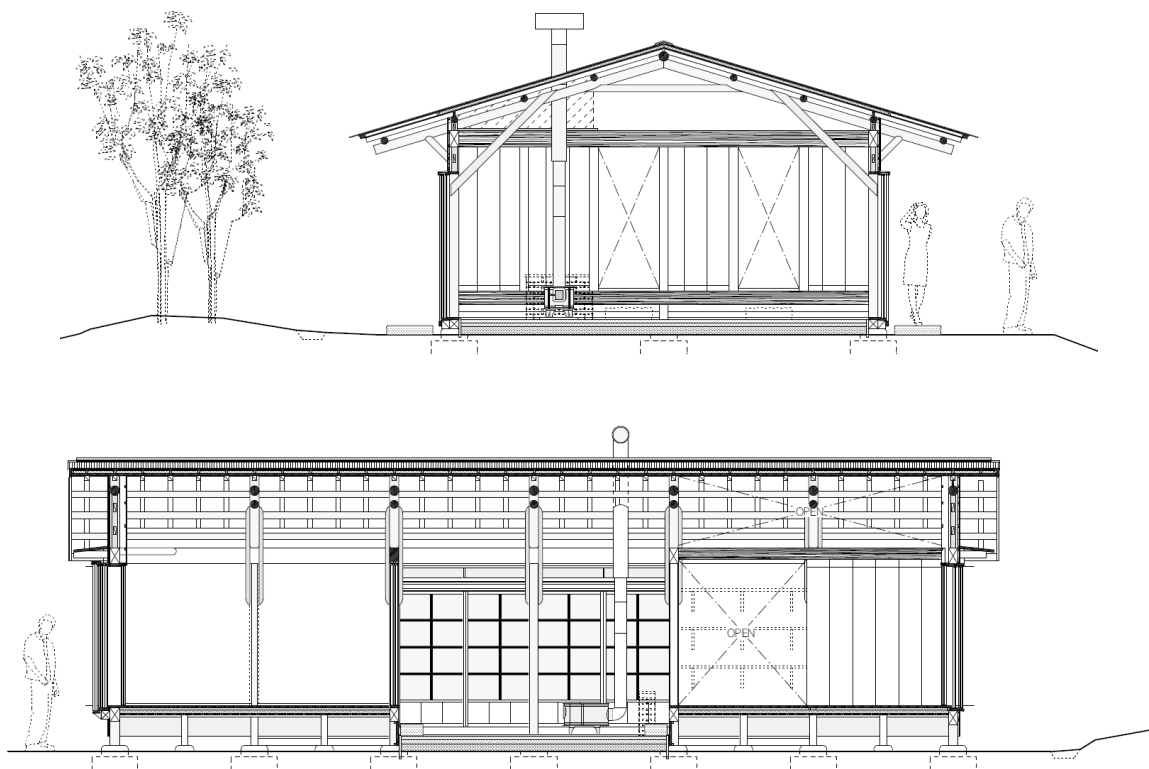
配置図・1階平面図



南側立面図



西側立面図



断面図

■お施主様の声

いかだ丸太の家は志摩の温暖な気候や常緑樹に恵まれた敷地の植生、海からの心地よい風などに配慮し、以前よりご縁のあった m5_architecte に設計を、東原建築工房に施工をお願いしました。

現しになった軸組、土間や土壁は、本物の素材から感じる重厚感と安心感があります。また外壁や床などにふんだんに使用された木は、気候や季節に合わせて収縮し、呼吸するのを実感しています。入居後は、古い障子の枠によしずを張った建具により風を通すように心がけています。広く開放的な土間は、地域の方が気軽に訪れる空間となり、暮らしの中心になっています。

今後は、隣地に建つ旧猪子家住宅（国の登録有形文化財）の活用も含め、居住者・設計者・施工者が一体となって、伝統構法の大切さを次の世代に受け継いでいきたいと考えています。

■設計者の声

構造材に真珠や牡蠣の養殖で使われる県内産のいかだ丸太を使用し、海辺にたたずむ簡素な作業小屋（浜小屋）や海女小屋をモチーフにしたデザインとすることで、お施主様が希望された「志摩らしさ」に対して、機能的・意匠的で近づけていくことに配慮しました。

また、伝統構法の施工スケジュールと材料の調達・準備のタイミングを合わせるのに苦労しましたが、土壁の竹小舞の竹割り、しだて、荒壁塗り、三和土の土間は地域で入手可能な昔からある素材を可能な限り使用し、お施主さまや知人の方など、地域コミュニティとの協働によるワークショップ形式で積極的に開催。現役を退かれた職人にもご縁あって作業に参加してもらい、若い職人の指導にあたることで技術を継承することもできました。

■施工者の声

いかだ用の細丸太のシザーストラス（屋根の構法）に木組み・土壁・石場建の伝統構法と、西洋と日本の木造の技術をかさねた建物です。この試みに若き棟梁が手仕事で挑む機会を頂きました。技術や伝統に込めた思いも、共に継承ができる事を大変うれしく思います。

また「気候風土適応型住宅」への取り組みを通じて温熱計算や実測調査による考察をします。これまで地域で育てて来たパッシブデザインに、科学的なエビデンスを得られることを期待しています。

今回のワークショップを通して、この地域で「出会い」と呼ぶ共働の場に子供たちも多く参加いただきました。彼らがこの経験を、次の世代に話し伝える日が来ることを楽しみにしています。